

10

熱河をなぜ討つか

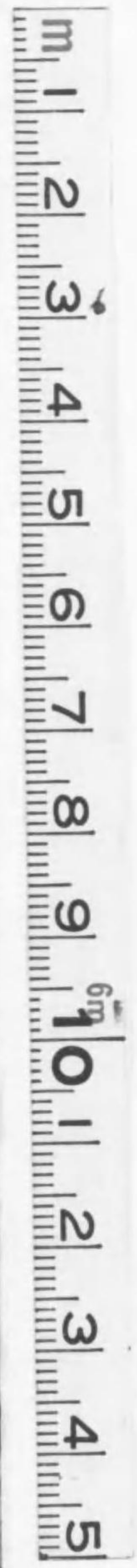
特251
87

348
144

新聞社編

東京 大阪
毎日 毎日
新聞 新聞
社 社

定價十錢



始

特251
87

大阪毎日新聞社編

熱河をなぜ討つか



大阪毎日新聞社・東京日日新聞社

序

支那側の挑戦、張學良軍の熱河侵入によりて、遂に熱河省において日支の兩軍、砲火を交ゆるのやむなきに至つた。避くべからざる形勢とはいへまことに遺憾なことである。たゞ熱河問題は事態必ずしも簡單ではないことは國際聯盟がいかにかこれを重大視したかによつてもわかる。軍事行動としては恐らく熱河省に限局されるであらうが、その政治的影響の及ぶところ支那全政局に係つてくる。本書は國際聯盟の暗雲を彼方に眺め、熱河問題の始末を叙べ、支那全局の鳥瞰圖を展望して、時局に對する考慮に資せんこ

とを期する。

昭和八年二月廿二日

大阪毎日編輯局にて

編者しるす

熱河をなぜ討つか 目次

一、何故熱河で戦はねばならぬか	一
二、國際聯盟は熱河問題を重大視してゐる	四
三、熱河湯玉麟叛く	一一
〔軍事上から見た熱河戦争〕	二〇
〔熱河戦争に關係ある支那軍隊兵數〕	二二
四、熱河戦亂におひゆる北支	二四
五、寄木細工の北支那	二九
〔北支軍閥の展望〕	三四
六、蔣介石の憂鬱	三八
七、熱河とはどんな處か	四四
八、熱河の歴史(熱河は元來支那領土に非ず)	五一
九、熱河の今後をどうする	五五



熱河をなぜ討つか

一 何故熱河で戦はねばならぬか

昨年三月一日滿洲國が建國宣言をやつてから早くも一年になる。この一年の間に滿洲國內の土匪はほとと掃蕩された、すなはち黒龍江地方では馬占山が討たれる、ホロンバイル地方では蘇炳文が露國に逐はれる、吉林東部の森林地帯に蟠居してゐた李杜は露領に逃れ丁超はわが軍に歸順した、これで主なる匪賊の頭目はみな平げられたのであるが、まだ滿洲國の西南地方すなはち熱河地方には一切手が加へられてはゐない。その熱河には湯玉麟を首領とする熱河軍がある。これが滿洲の政治に従はないのみか、最近に至つてはこれを後援する張學良の支那正規軍が北平、天津方面から萬里の長城を越えてドンドン熱河地方に侵入し來り、これらによつて使嗾操縱されてゐる偽勇軍や匪賊がうごめき立つて今では熱河省一帯はあたかもこれらの反滿軍

のために化膿して、これにメスを加へなければ満洲全體の治安を保つことが出来ないやうな状態になつてゐる。日滿議定書の條章によつて駐滿日本軍がこの方面に出動しなくてはならぬことは全くやむなき次第である。

二

いかにも日滿議定書により滿洲國々防について充分の責任を負はねばならぬ日本であるが、その日本とても何も好き好んで滿洲各地で軍隊を動かしてゐるわけでない。非常時日本の財政は風船玉の様に膨れて國債百億といふ時代が二三年中にくるに決つてゐる。日本軍としても滿洲における軍事行動を一日も早く非常時より常時に復歸させねばならぬ。ところで未だに滿洲國の治安の完全に保たれないことは上述の如くである。滿洲國も日本も建國のプログラムからいつても或は國策上からいつても熱河の鎮壓を期せねばならぬ。熱河省はいふまでもなく立派な滿洲國の領土である。故に今の状態からいふならば滿洲國の領土權は支那に侵され、滿洲國の官吏として滿洲國に盡さねばならぬ湯玉麟はこの侵入軍に内應してゐるのである、この意味からしても滿洲國は勿論その國防の一半を背負つてゐる日本としては大義名分からも熱河の現

状は坐視できない。是非ともこれを討伐せねばならぬ情勢に立到つてゐる。滿洲國においては既にその討伐軍の陣容を整へた、日本においてもその討伐のやむを得ざる事情を當局から或は公式に或は非公式に明にしてゐる。國際聯盟は日支紛争を丸く納めんとして和協の方法を講じないわけではなかつたが、滿洲の事情がまだホンとに判つてゐなかつた上に熱河に對して日滿兩國が討伐軍をおこなねばならぬ情勢にあるのを見て、日支紛争の新しい擴大であると見なし遂に和協の方法を斷念してしまつたからである。しかし事ここに至つては國際聯盟は國際聯盟であり、滿洲國の治安維持は滿洲國の治安維持である、しかも仔細に事情を吟味すれば熱河の治安を紊してゐる湯玉麟軍や、僞勇軍も最近支那から侵入し來つてこれを助けつゝある支那軍もその指揮を實に北平にある張學良に仰いでゐる、つまり張學良一派が現在の態度をとつてゐる以上は、熱河を紊してゐる源を絶つためには是非とも張を如何にかせねばならぬこととなる。それは同時に南京の國民政府にも重大な關係を生ずる。熱河の問題は單に日滿支三國にとり宿命的な大問題たるのみならず今や更に進んで全世界の問題と化するであらうし、その視聽を熱河の一點に集めつゝあるのも餘儀なき次第といはねばならない。

二 國際聯盟は熱河問題を 重大視してゐる

一 聯盟の態度一變

ところが、この見やすい道理の上に立つ熱河問題の真相を國際聯盟はどうしても把握してゐない、國際聯盟が滿洲問題を取扱つていよくその最後といふ段になつて聯盟の態度は俄然險惡の状態から最險惡の状態に變じた。ジュネーヴからの報道によれば熱河問題の緊迫、それが聯盟をしてかうまで硬化させた重大な原因と傳へられる。

従來、聯盟内の歐洲側諸國をリードしてゐたのは英國であつた。特に今度の日支紛争の處理に方つては、英國外相サイモン氏の動きが重大な意義をもつてゐた。幾度か危機に瀕した會議の局面をとりなして、ひたすら和協への道を發見すべく努力を惜しまなかつたのもサイモン外相だつた。それが形勢一變、かね／＼親目的と見られてゐたサイモン外交が、クルリ急轉向を試みたのである。そこに理由がなくてはならない。

すなはち熱河問題の切迫とともに、死物狂ひの支那は、お手のもの、逆宣傳で、今にも日本軍が熱河を越えて北平、天津地方に進出し支那ののど首を締め上げるかのやうに騒ぎ出した。これが案外ジュネーヴの空氣にガンと響いた、それだけならよいが萬一平津地方に戰亂が波及したのでは英國にとつて大問題、米國もさうだ。これは一大事！と考へたのがサイモン外相、それに佛國も追隨して、聯盟の態度が一ぺんに硬化してしまつた。これを要するに聯盟の硬化は少くとも熱河問題に關する限り、次の二つの原因が根強く横たはつてゐる、すなはち

一、熱河地方への日滿軍進出

二、熱河戰亂の餘波が北支那、殊に北平、天津地方に及ぶこと

實際をかした話で、滿洲國が自己の主權の發動の下に、自國の領土の一部である熱河において、自國の官吏——湯玉麟は滿洲國政府が任命した滿洲國參議府副議長兼熱河省長であつた、もつともこの二月に彼はすつかりこれらの官職を罷免されたが——すなはち自國の官吏の謀叛を討伐するに何の不思議があらうぞ。黒龍江省で馬占山が謀叛した時もこれを討伐したではないか、ホロンバイルである滿洲里事件をひき起した時にも滿洲國政府は叛將蘇炳文を叩きのめしたではないか、熱河の叛將湯玉麟を討つのもこれと全然同じである。であるに拘らず、國際

聯盟は馬占山討伐、蘇炳文討伐の時には一言も文句をつけないうで、なぜこんどの熱河討伐の時だけにむくれ反つてその態度を硬化させたのであるか、およそをかしい話といへばこれ程をかしい話はないはずである。

しかし國際聯盟がかうした態度をとるに至つたのもわけがないでもない。それは國際聯盟は熱河省をもつて滿洲國の一部に非ずと見てゐるからである。これは大きな認識不足、熱河省をもつて完全に滿洲國の一部と見てゐる日本や滿洲國と全然違つた立場に立つ。それでは何で國際聯盟がこんな大きな認識錯誤を敢てしたのであらうか、それは全くリットン報告書に誤られてゐるからである。リットン報告書はいろ／＼誤謬を犯してゐるが、これなどはその最も大なる誤謬の一つである。ではリットン報告書は熱河をどう取扱つてゐるか、まづこれを吟味して見よう

二 リットン報告書と熱河

リットン報告書はまづその第六章「滿洲國」において次のやうに記してゐる。(國際聯盟事務局公定譯による)

熱河省は今日に至るまで滿洲において起つた政治的變動に捲き込まれるを避け來つたのであ

る。熱河省は内蒙古の一部である。現在は三百萬を超える支那人移民が同省内に居住してゐるが、これ等支那人移民は漸次遊牧蒙古人を北方に押しやりつゝあるのである。(中略) 彼等蒙古人は自尊心強き人種であり、蒙古人にしてチンギスカンの大武勳、蒙古武人の支那征服を記憶せざるものはない。彼等は支那の宗主權を好まず、殊に彼等を彼等の領土より漸次驅逐しつゝある支那人移民を惡むものである。

この點は滿洲國の獨立に熱河の土民すなはち蒙古民族が好意を寄せ、これに協力を希望したことを示唆するものである。

しかるに、その次に報告書はかう記述してゐる。

『熱河省長湯玉麟將軍は九月二十九日(一九三二年)同省の全責任を執り、滿洲に於ける彼の同僚と聯絡を執りつゝありと傳へられてゐる。三月九日の「滿洲國」建國に際しては、熱河省は新「國家」に包含されてゐた。然しながら事實上は同省政府によつて何等決定的なる措置が執られたのではない』

つまり聯盟を誤らしめたのはこのためである。すなはち滿洲國建國當時においては熱河省はたしかにこの新國家に包含されてゐたが、實際上の手續において同省は何等決定的最後の措

置をとらなかつたので滿洲國の一部と看すわけには行かないといふやうな心持ちである。

元來リットン報告書は明確なる斷定を避けてゐる箇所が少くないから頗る判斷に苦しむが、前述熱河省の件もたしかにその一つである。尙熱河省の政治的位置を不明確に陥らせてゐる文句に次のやうなものがある、すなはち同章『各省及び特別區』の項中に「滿洲國國家」が包含すると主張される地域について同委員會が質したところ、同國家の境界を示す左の一節を含む書翰を受領した。

『新國家は南は長城に依り境せられ、同國內の蒙古諸旗盟及び諸旗族はホロンバイル及び哲里木、昭烏達、卓索圖の諸盟及びそれ等に屬する諸旗を含むものである』云々

これによつて見れば同委員會は熱河が滿洲國の一部であることを諒解してゐるはずである。それにも拘らず第六章は結論して曰く

『滿洲國政府』は滿洲の支那人によつて日本人の手先と看做され、一般の支那人はこれに何等の支援を與へてゐないといふことである』

三 熱河省は建國に參畫した

しからば事實は果して如何、熱河省が滿洲國を構成するや否やにつきては、まづこれを沿革について見なくてはならぬ、次に建國當時の事實について見なくてはならぬ、しからば事實果して如何。

まづ沿革についてこれを見れば、滿洲はもと申すまでもなく奉天、吉林、黒龍江の三省を併稱して東三省もしくは東北三省と稱してゐた、ところが今から四年前に至り熱河地方に省制が布かれると同時に、前記滿洲三省にこの熱河省を加へ、東四省もしくは東北四省と稱しつゝ、今日に至つてゐる、つまりこの沿革が示してゐるが如く、地理的にいつても、政治的にいつても張學良の舊軍閥時代から熱河は滿洲と共に支那本部から切り離された一つの大ブロックであった。これを沿革的にいつて滿洲國が熱河をその領域中に包含するゝものとして諸計畫を進めたことは觀念上當然である。

のみならず熱河省の支配者湯玉麟の態度がまた十分この當然なる事實を裏書きしてゐる。そも、滿洲が張學良の支配下にあつた當時から省主席として熱河の實權を握つてゐたのは湯玉麟であつた。有名なアヘン王國熱河に君臨して湯は得意だつた。その矢先、滿洲事變が勃發した。しかも日本軍一たび起つや獅子奮迅の猛威を揮ひ、滿洲を席捲したので支那人一流のする

さから彼は頼冠り主義、日和見主義と出た。しかし熱河の住民（大部分は蒙古人）はかねてから民族獨立を希望してをり、新興滿洲國の出現を歓迎してこれに好意を寄せてゐた。従つて日本軍は敢へて熱河に手を染めることなく、舊軍閥一掃の跡に、湯玉麟だけが命拾ひの貌で残つてゐた。しかも滿洲にあつた學良軍の大部分は奉山線を海岸傳ひに關内に逃げ込んだ。一部の兵匪は逃げ場を失つて熱河省内へ遁走した、それが今日の禍因の一となつてゐるのである。

さうかうする内、滿洲に新政權が樹立さるゝに至り、湯玉麟は再び考へねばならなかつた。いはゆる三千萬民衆の輿望がどこにあるか、を知つては湯自身晏如として獨立運動の成行を傍觀してゐるわけには行かない。しかも獨立運動はモノになりつゝある。これなら、と湯は考へた。そこで自己の代表者を派して獨立運動に参畫せしめた。この湯の代表謝呂西は、かくして建國會議にも出席してゐるし、獨立宣言にも湯に代つて署名をしてゐる。滿洲國では湯が協力の意思十分と見て、彼に滿洲國の参議府参議副議長兼熱河省長といふ顯職を與へた。これで完全に湯は滿洲國建設に参じ、新國家の官吏となり、従つてその率ゐる熱河はこれによつて完全に滿洲新國家の構成分子となつた、昨年執政就任式に當つて新京に自ら來る能はざるや、彼はこの事情を述べて代表謝呂西をして執政にお詫びを言上せしめた。

それが何故今日の羽目に陥つたか？

三 熱河湯玉麟叛く

一 張學良との腐れ縁

滿洲事變からひいてその建國に至るまで滿洲國に好意をよせてゐた熱河省の湯玉麟が何が故にその後次第に叛意をいだくに至つたか、一口にその理由を尋ねればその背後に張學良があつたことに歸着する、熱河省は地勢から見ても奉天や吉林とすつかり違つて萬里の長城によつて北支と直接境を接してゐる、その首府熱河（一名承德）は張學良の牙城である北平から自動車で一日の行程である。また張學良は一昨年の滿洲事變の結果間もなく倒れるだらうとは世間一般の考へるところであつた、思ふに滿洲建國當時は湯玉麟もやはりそんなつもりで滿洲國に組したのであつたらう。ところがその後になつても張學良はなかく倒れさうにない。滿洲を失つた責任者として支那各地で彼を非難するものは多數であつたが、蔣介石との特別な關係もあつて容易に倒れないのみならず、彼は滿洲事變以前その二十萬の軍隊中の大部分を滿洲から北

平、天津方面にもつて行つてゐた、彼の軍隊は滿洲事變で極く一部分が傷ついたに過ぎない。かくの如き張學良が湯玉麟の側近くに頭張つてゐては湯も容易でない。いつとはなく張學良の魔手にひつかゝる様になつた。

なほ熱河には湯玉麟にとり張學良にとり垂涎の的である巨額のアヘンが産出され、それから上る税金は三千萬元にも達する、熱河省内のアヘンは全く熱河省の唯一の財源であつた、熱河歴代の首腦者はいづれもこの熱河のアヘンに重い税金をかけて非常に私腹を肥してゐた、湯玉麟もまたその例に漏れず張學良の下で熱河を手に入れて以來すでに數年間に亘り、この莫大なアヘンを奉天方面へ盛に賣出すことにより甘い汁を吸つてゐたのであるが滿洲事變は湯のこのアヘンの販路をぶつゝり杜絶さしてしまつた、王道政治を誇る滿洲國ではアヘンの自由販賣は御法度である、熱河から勝手には出させぬことゝなつた、これは熱河にとり湯にとつて死活の問題である、さすがの湯もこれには閉口した。

湯がさてこの販路を何處に求めようかと血眼で物色してゐるとき、これ好機とばかり、こゝにつけ込んだのが南に境を接する張學良であつた。つまり張學良は熱河省のアヘンを滿洲に出さず熱河省から張學良の勢力下にある河北省に流れ込んでゐる灤河によつて灤州に運びだすことを勧告したのである、張學良はたゞ親切にこれを勧告したばかりでなく、湯がもしこの勧告にグヅ／＼いへば背後から兵力をもつて迫るぞといふ強談判も持かけたのである。湯に見ればアヘンをもつてゐるだけでは仕方がない、金にせねばならぬ。また一朝有事の際滿洲國に援軍を求めても直に兵力で援助してくれるか如何かむつかしい問題である。ともかく一時でも張學良と手を握らうといふ氣持になつた。かくして湯、張の間はアヘンで接近するに至り、湯は滿洲國に對する忠誠を破る動機となつたのである。張學良はこれによつて巧に湯に渡りをつけることに成功し、湯の反滿態度をひそかにほくそ笑みつゝその使囑の手を次第に露骨にしはじめた。湯玉麟も最初はホンの一時的と考へてゐたかも知れないが次第に深みに陥つて行き昨年七月頃には略完全な叛逆者となつてしまつた。

二 いよく 抗日反滿の態度

かくの如く一變した湯の心底が表面にさらけ出されたのは、昭和七年七月十七日關東軍の囑託として石本權四郎氏が湯と熱河方面の匪賊討伐に關して連絡すべく熱河に派遣されたとき、錦朝線の南嶺附近で人質として匪賊に拉致された事件であつた、この石本事件はあらかじめ同

氏の熱河行を知つて、これに危害を加へようと湯玉麟の熱河軍が匪賊と連絡して故意に行つたものであることがその後次第に明瞭となつてゐる、その後日滿側からは丁寧極る石本氏の救出交渉が頻繁に重ねられたが湯の命令と稱するものが毫も徹底しないのみか、一旦引渡しを明言しながら再び石本氏の身柄を他へ移したりするのみで救出は遷延するばかり、石本氏受取りにでむいたわが少数の軍隊は熱河軍に射撃されたことさへもあり、この二月十八日には石本氏はつひに惨殺されたらしいとの報道さへもたらされた、かうした湯の態度に日滿軍が憤慨してゐる時、また張學良、湯玉麟の陰謀、熱河軍の計画的挑戦行動が現れた、昨年十二月八日の山海關事件がそれである、十二月八日午後十時十分わが裝甲列車が淡水補給のため山海關驛に向ふ途中、長城附近に差しかゝるや山海關の獨立第九旅何柱國軍は突如列車に一斉射撃をあげせ、わが軍は止むなく應戦して何柱國軍を撃退したが何柱國軍は兵舎に立て籠つて敵對行爲を續けたのでわが山海關守備隊はつひに攻撃を開始し敵を沈黙せしめたのであつた、石本氏拉致事件に拍車をかけたこの山海關事件の勃發は熱河問題にますます危機の孕むを感じしめた、一方國民政府は國際聯盟にのみ頼つて滿洲問題を解決するのは手ぬるしとして、日本牽制のため無鐵砲にも露支國交回復を無條件に壽府で成立させ、更に支那中央の蔣介石は後で説明するやうな事情で積極抗日の強硬政策へ邁進し政府も第三次中央執監全體會議で積極抗日を可決した

三 のつびきならぬ張學良

この方針に基づく抗日命令は直に國民政府から張學良に授けられた、張學良も日本の精銳な軍隊と戦つて勝味のない事を知らぬほどの馬鹿者ではないけれども、何としても中央政府や國民にヤイ／＼いはれ滿洲全體を失つたのは張學良の責任だなどいはれて見ると、その手前だけでも何とかせねばならぬ、遂に昨年末頃から百パーセントに氣が進まぬながらその正規軍を熱河に入れるに至つた。湯玉麟もこれには驚いた。つまり支那の地方軍隊移動の際よく見るやうにあまり張學良の軍隊が入つてくるとその軍隊に湯玉麟が追はれる恐れがあるからである。張、湯親密であるといふのは要するに金の問題で仲よしになつてゐるので、利害關係が反するやうになれば仲違するのは當然である。張の正規軍が熱河に入つた時には一寸仲違ひした。しかし湯も今更ら張と争つても敗けるにきまつてゐるので、いや／＼ながらも張のいふ通りにならねばならず、破ぶれかぶれで湯もいよ／＼抗日反滿の臍を固むるに至つた、かくて昨年末からこの方面は俄然緊張し、本年一月末から急角度に形勢は悪化して來た、「日本軍がもし熱河に進

んだならば聯合軍三十萬をもつてこれに當る」と宣傳し支那側の熱河を中心とする攻防作戦はいよいよ大がかりに進展して来た。

この抗日作戦は爆弾を抱いて火に近づきやうな危険さであることは、實は支那側でも萬も承知である、そこで内心眞個の事をいへば張學良も湯玉麟もびく／＼の態で日本軍に對してゐるものゝ今さら後へさがること出来なくなつた状態である、かくて張學良の正規軍は續々と滿支國境である萬里の長城を越えて滿洲國領である熱河省内へ侵入を開始した、ジュネーヴの代表達の眼をくらすませ、その空気を自己に有利に轉向させるため日滿兩軍を複雑な國際關係の陥穽に踏み込ませるため、張、湯の作戦計畫は進んで行つた。

しかしかやうにお隣りの物騒な客人たちに自分の領土を侵されては滿洲國としても黙つてゐるわけには行かない、また日滿議定書の關係上この事態を日本が黙視することの出来ないのももちろんである、そも／＼日滿兩國が熱河一掃を決意するに至つた根本原因はこの事態の發生によるものであつて、熱河省内への張學良正規軍の侵入は正に日滿軍に對する張、湯の事實上の宣戰布告と同様である、かくして張學良麾下の大規模の支那正規軍は總勢實に二十萬、萬里の長城から熱河への通路である喜峰口、古北口などを経て夜を日について進出し偽勇軍、正規軍、

自衛軍など北は魯北から南は北票、凌源一帯まで奉天省境に接して大抗日線は布かれ事態は次第に迫り二月中旬には全く蔣、張、湯の反滿抗日戦備は完了し二月十六日支那側は對日滿軍作戦のため新たに左のごとく戦闘序列を定め全線に對していよいよ出動命令を發した。

- 第一集團軍總司令 張學良
- 第一軍團于學忠
- 第二軍團宋哲元
- 第三軍團商震
- 第四軍團萬福麟
- 第二集團軍總司令 張作相
- 第五軍團湯玉麟
- 第六軍團張作相(兼任)

四 熱河に戦雲みなぎる

かくて反滿軍はまづ二月初旬偽勇軍根據地を赤峰に、正規軍根據地を熱河(承德)に、通遼、

錦州には自衛軍、僞勇軍の主力をおく陣形をとつた、この兵力配備の上に網の目のやうに張られた兵站線、自動車、駱駝による彈藥、兵器の輸送は大熱河の廣原を砂塵を巻いて縦横に運ばれ食糧は熱河、赤峰、凌源などの各主要地點に堆高く蓄積された、また陣地は北は開魯から北票に下つて朝陽に延びる第一線、建平、赤峰、凌源、熱河をつなぐ第二線の彪大な設備が既に完成し、各都市の外廓には散兵壕が蜘蛛の巣のごとく掘られたが例年に異つて今年の熱河は殆んど積雪なく、熱河特有の黄砂が蒙古嵐に吹きまくるので山といはず野といはず連日天地晦冥の状態で一面に掘られた散兵壕は忽ち黄砂で影も形もなくなり、さすがの敵軍もこの自然の復讐に早くも疲れを見せてゐる有様であるが、ともかく朝陽寺から西走する鐵道の終點北票正面の陣地は最も周密を極め地雷火、鐵條網など近代戰爭科學の粹を集め、いよ／＼北は開魯から新京方面を、中部は北票から奉天を、南部は凌源から綏中を衝き忽ち滿洲國攪亂の大總攻撃を加へんとする攻勢をとるに至つた、二月十七日には北平滯在中の宋子文も張學良、朱慶瀾、張作相とともに北平南苑飛行場から張學良の自用飛行機で熱河に向ひ、湯玉麟と協議の上抗日總攻撃令の下準備にとりかゝると同時に張學良は當然事態は平津間においても戰鬪不可避を決心し天津を中心に北支の陣地をも築きつゝありと傳へられる。

なほ熱河省には北票附近にチョツピリ鐵道があるだけで、この省内の戰爭では鐵道は敵味方ともあまり利用できない。しかして自動車の通る道は相當にあるのだから、自動車は相當に役立つことであらう。もとより飛行機の活動はいふまでもない。飛行機については張學良軍もあんまり馬鹿にできない。

昨年(去年)の上海の戰鬪でわが軍飛行機がウンと活動して關北方面に大損害を與へたことは南北支那上下を通じて一大衝動を與へた、その後日本各地で愛國號が次から次へと獻納されたことも支那に非常に刺戟を與へた、支那の新聞といふ新聞は支那の國防上飛行機を充實する必要があることを大々的に論じはじめた、日本にまけるものかと飛行機を造つて寄附しようといふ様な運動も盛んに行はれてゐる、政府も同様飛行機熱をウンとあげてゐる上に米國その他の商賣人がこの機運を巧く利用してゐる、支那に飛行熱がおこつても飛行機は作れない、結局米國邊りから買はねばならぬ、そこが米國商人なんかの狙ひ所である。かくて最近支那軍の飛行機は非常に増加した、張學良軍も勿論同様である、しかし急に飛行士は養成できるものでなし、米國邊りから雇つて來てゐるといふ説もある。従つて昨年上海の戰鬪において米人ショートが飛行機を操縦して支那軍中で活動した様なことが熱河で繰り返され、それは三人や五人でないかも知

れない。わが軍戦闘機もこゝに面白い相手を見つけ得るかも知れない。なほ支那軍はわが飛行機をおそれて到る處に高射砲を用意してゐる由だから、いくら支那軍の大砲だとしてこれを馬鹿にしてばかりはかゝれまい。いづれにしても熱河戦は興味をそゝる。

〔軍事上から見た熱河戦争〕

熱河は大半が山岳地帯で地形的に見て我が山梨縣に似て居り、鐵道としては僅かに錦州から北票に通じてゐるだけで、交通的には丁度高知縣のやうな所である。地形の上から見れば兩軍の間には當然山地戦が展開されるものと思はれるが、鐵道の無いといふことは大軍を進める上に大影響を及ぼすのだ。山地戦にかけては日本内地の地勢が山だらけなので皇軍としては戰術的にまた用兵上に極めて妙を得てゐるといつても敢て過言ではあるまい。且つまた敵は單に衆をたのみ匪賊の如きものだから大した心配はいらない。只困ることは糧食の點で、戰の原則としては「糧を敵に依る」として居るが、こん度はさうは行かない。給與の點で行く先々で大軍を養ふだけの土地が無いことが第一の困難だ。先方で糧食を得られないとすれば軍の後から送るより外はないが、さて鐵道が無くしかもその代りをする自動車路が不完全で、先づ北平、承德(熱河)

河) 赤峰、林西と通ずる道路以外には大したもの無く、日滿兩軍は特に自動車路を作りつゝ進軍せねばならないことが第二の困難である。糧食と彈藥をドン／＼補充することが出来ないとなれば、一日四里とした戰時行軍も尙短縮されねばならず、或ひは敵と衝突した場合には、食物と彈丸に離れ、永い戰鬪を肉彈を以て戦ふやうな場合も現出されるかも知れない。險難な山地に奮戦する日滿兩軍の辛苦の程がうかゞはれる、更に從來の滿洲におけるやうな作戰即ち相手に殲滅するためには誰に氣兼ね遠慮も無く勝手な行動が取れてゐたのが、こん度は萬里の長城以南には外國の權利が錯綜してゐる關係上、兵火を極力さけねばならぬので作戰上に制限を受けなければならぬ譯だ。昨年も山海關の所まで追ひつめたが、それより南には追撃することが出来ず、惜しい所で長蛇を逸したやうに、かうした作戰上に制限を受けなければならぬことは第三の困難とも考へられる。

この熱河討伐戰で第一に活躍を期待されてゐるのは我が空軍で、偵察に爆撃に徹頭徹尾敵陣を寒からしめるものと思はれるが、敵もまたこれ有るを知つて各方面に高射砲を多數配置して居ると云ふ情報が入つてゐる。

飛行機に續いて重要性を持つものは短波、長波の無線電信だ。山地において遠く離れた友軍

と互に連絡して敵を撃つには有線よりも無線の活躍が第一だ。張學良軍の無線完備は有名なもの、その意味で熱河戦は一種の無電戦ともいへよう。

最後に兩軍作戦の根本を考へると張學良軍の取る作戦は明らかに内線作戦だ。一方を一部隊で押へ有力な他の部隊を以て日滿兩軍の一方を叩き、返す刀で今まで一部で押へてゐた他方を撃たんとするナポレオン得意の戦法だ。これに對する日滿兩軍はいはずと知れた外線作戦、敵を袋の鼠にして全滅せしめんとする彼の日露奉天會戦と同様の作戦だ。精銳な軍隊ならイザ知らず、大軍をのみ頼みとする學良軍に果してこの困難な内線作戦が成功するだらうか。

とにかく飛行機、無電、山砲、自動車隊その他日滿兩軍の新銳兵器の活躍は、山地戦を得意とする皇軍將兵の勇敢な進撃と相俟つて、數倍に餘る侵入軍を粉碎して、熱河掃匪は單に時日の問題として残されてゐると思ふ。(この項陸軍砲兵大佐井關隆昌氏筆)

〔熱河戦争に關係ある支那軍隊兵數〕

(昭和八年一月廿日現在)

熱河省内兵力合計

九六、〇〇〇

内譯

湯玉麟の正規兵	一九、八〇〇
同 自衛軍	一二、〇〇〇
馮 占 海 軍	一五、〇〇〇
鄧 文 軍	六、〇〇〇
李 海 青 軍	二、〇〇〇
劉 震 東 軍	五、〇〇〇
何 清 明 軍	三、〇〇〇
その他の雜軍	一一、二〇〇
張學良正規軍(歩兵四ヶ旅)	二二、〇〇〇

別に砲兵二大隊熱河方面に移動せんとの説あるも不明

山海關方面の兵力合計七六、八〇〇

内譯

張學良直系(歩兵三ヶ旅)	二六、八〇〇
雜 軍 四ヶ師	五〇、〇〇〇
北平、天津(含まず)以南河北省	
兵力合計(歩兵二ヶ旅)	二三、〇〇〇
騎兵二ヶ旅)	
張家口附近兵力(歩兵一ヶ旅)	八、八〇〇

四 熱河戰亂におびゆる北支

一 社會的不安、政治的不安

熱河の戰亂に北支那はおびえてゐる、中にも北平や天津地方では最もおびえてゐる。それは負けるときまつてゐる支那側では熱河戰亂の餘波が必然的に平津地方に打ちよせて來ると思つてゐるからである。

熱河と北平との距離は約六七十里、自動車行程で一日、歩行程で五日、兩地の間に萬里の長城が蜿蜒と横たはつてゐる、熱河から南下すればすぐ萬里の長城、長城を南に越せばもう北平まではいくらもない。のみならずこの兩地の間は昔から關内關外の通路で、熱河から長城の古北口、喜峰口、馬蘭關を過れば一路北平に行けるし、界嶺口を入れれば撫寧、灤河を経て天津に行くことが出来る、交通は至便、距離は近い、熱河戰亂の餘波を北平、天津で恐れるのは無理もあるまいそこで北支那の人々は何を恐れるかこれは二つに分けることが出来る。

一、熱河の敗兵が日本軍に押され、續々長城を越えて北平、天津方面に逃げ歸りて匪賊とな

り地方の治安を亂すであらうこと。

二、この地方不安が引いて政治的に變化し、たゞさへ寄木細工のやうな持ち合ひで靜平を保つてゐる北支那の政局を何等かの變化に導くであらうこと。

つまり第一の恐怖は、敗兵の匪賊化による社會的不安であり、第二はこの社會的不安から誘發さるべき政治的不安である。

こゝであらかじめ斷わつておかねばならぬ一つのこととは、日本軍が熱河討伐の餘勢を驅つて長驅滿支の國境を越えて北平を衝くといふことである。支那側ではこれを何よりも恐れてゐる、支那側が聯盟に向つて訴へたところも、この點である、しかしながら日本軍が熱河討伐に止まつてそれ以上に及ばないといふことはすでにわが駐滿大使館でも聲明してゐる、二月十五日當局者談話の形式で發表された駐滿大使館の聲明の一節にいふ――

熱河工作が北支に波及する危険を憂慮し兎角の批評をなすものがあるが、北支問題が熱河のそれと全く別個の問題に屬する事實を諒解せざるに出でた誤解である、事件が北支に波及することあるべき危険を憂慮して滿洲全土にわたる治安攪亂を拱手傍觀すべしとなすは全く筋の通らない議論である。支那にして北支における日本の權益を侵さざる限り問題は同地方

に及ぶべきものでない。北支動亂の惹起せられると否とは一に支那側自體の問題である、萬一支那側の態度が滿洲國側を強く排發し動亂を惹起する場合はその責任は全く支那側にあるべきことは勿論である。

二 敗兵はそのまゝギヤング

然り、「北支動亂の惹起せられると否とは一に支那側自體の問題である」、そこでこの問題はしばらく問題外に置きまづ支那敗兵の匪賊化から起る社會的不安から眺めて見よう。支那の軍隊の常として、軍隊の節度統制を失つた兵士が一番危険である、軍隊にも種々あるが正規軍と稱するものは最も完全な統制がとれてをり、給料も比較的に行き渡つてゐる、しかし偽勇軍となると臨時に雇傭された軍隊であるだけに繼子の待遇を受け給料なども十分行き渡つてをらず、その質も訓練されてゐず粗悪なものが多い、況んや土地の土着軍に至つては例へば馮占海軍、鄧文軍といつたやうなものは、打明けてゐれば馮占海とか鄧文とかいふ者を頭に仰ぐ匪賊の集團であつて、これを軍隊と呼べば軍隊であるが、この名を奪へば元の匪賊に還元してしまふ、申さば軍隊と匪賊の區別は紙一重であつて、節度を失つた後の支那軍はその

まゝギヤングである、しかし彼等は武器と彈藥とをもつてゐる。

これらを一括して目下熱河に侵入散在してゐる支那軍隊は約二十萬と稱せられる、假りにその半分が敗走して北平、天津地方に亂れ歸るとしても十萬に近い不氣味な客人をこれらの地方は迎へねばならぬ。

平津の人々が熱河戰亂におびえるのも全く無理もない話である。

問題は張學良が北支の治安を維持するために、これらの敗兵を十分抑へることが出来るか否かといふことである、北平、天津にはたゞに支那國民ばかりでなく、外國の居留民たちが澤山居る。この一帶の禍亂は單に支那國民のみへの禍亂でなく、國際的に波及すべき性質のものである。張學良としては死力を盡しても、これを抑へねばならぬ立場にある。

學良もこれには閉口してゐる。傳ふるところによれば、北平にて彼と宋子文との會見において、退却の場合、最も質の粗悪な偽勇軍、土着軍等は北平と異つた方面の察哈爾へ退却させ、北支那方面へは張學良の正規軍のみを引揚げしめようとはほど決定したとのことである、しかしこれとても果して豫定通りにうまく行くかどうか、何等北支の治安が紊ることなければ結構だが、ともかく熱河戰争の後半期において最も注目すべきはこの北平、天津の治安である。

三 北支不安と外國居留民

このことを憂へて英國資本にかゝる開採炭礦當局は「北寧線による軍隊、軍需品の輸送は同炭礦の營業妨害になり且つかくの如きは義和團事變最終議定書にも反するから北寧沿線における戦闘を回避されたい」との要請電報を二月十八日附學良に發してゐる。何しろあの正月早々勃發した山海關事件にでも平津居留民はスハとばかりにある決心を餘儀なくされた位だから、不安の程度も察し得べく北平外交團ではしきりにこの點を懸念し萬一の際に應ずる避難方法を用意してゐると新聞は傳へてゐる。

元來北平、天津方面における動亂に對する用意は列國でもあの明治三十三年の義和團事件に懲り／＼して十分調べられてはゐる、北平では交民巷（公使館區域ともいふ）なる特別區域があつて、義和團事變議定書第七條に「列國は各その公使館のために常置護衛兵を組織し且つ公使館所在區域を防禦の狀態に置くの權利を有し清國人は右區域内に住居の權利を有せざる」と明確に規約された萬一の場合は日本は列國と協議の上動亂各地を軍事的に占領することも亦可能である、義和團事變最終議定書第九條に「清國政府は一九〇一年一月十六日の書簡

に添附したる議定書を以て各國が首都海濱間の自由交通を維持せんが爲に、相互の協議を以て決定すべき各地點を占領するの權利を認めたり、即ち此の各國の占領する地點は黃村、郎房、楊村、天津、軍糧城、塘沽、蘆臺、唐山、灤州、昌黎、秦皇島及び山海關とす」とあるものすなはちこれである。

五 寄木細工の北支那

一 引火状態にある北支

もし支那敗兵の匪賊化によつて北平、天津地方の社會的不安に陥るだけに留まるものならば、かうまで支那側は熱河問題を恐れないであらう。しかしこの社會的不安は忽ち北支における政治的不安を誘發する惧れがある、支那の不安はこゝだ、北支那における政治的現狀は、群雄割據、しかして張學良がこれを抑へるだけの勢力がなく、辛うじて保たれてゐるこの北支那政局は、熱河討伐によつて張學良の位置が搖いで來ると共にどうなるか分らぬ状態である、例へていへば北支那の政情は今や引火状態に置かれてゐる、一たび一點の火が點ぜられると火は次第

に燃え伸びるであらう。

今北支那の各地に蟠居し、隙さへあらば北平に乗込んで張學良に代つて北支那の主人公とならうと虎視眈々たる者をこゝに拾ひ上げて見れば、まづ第一に山東の韓復榘、綏遠の宋哲元、山西の閻錫山、手兵は今持たないが政局動搖の度毎に噂さる張家口の馮玉祥、この外に支那政界の大御所段祺瑞を繞る安福派の瘦浪人、往年支那のナポレオンと謳はれた吳佩孚の直系は勿論のこと學良直系と見られる于學忠や何柱國だつて學良に萬一のことでもあればどうなるかわからないとの消息もあつて、北平順承王府における學良の夢は決して圓かではない。只今のところでは表面上蔣介石は學良を支持して共産軍討伐などをやつてゐるが支那第一流の役者たる蔣の腹の底などわかつたものでない。

二 くせ者韓復榘

右の中でも南京と北平、天津を結ぶ所謂津浦鐵道の中間濟南に鎮座して、しかも最近宿敵劉珍年を山東から追ひ拂つて芝罘といふ海港も自家藥籠中のものとなし得た今日、北支におけるくせ物は韓復榘であらう、今年四十四歳、嘗ては宋哲元らと共に、北支軍界の謎の人物とされ

てゐた馮玉祥の幕下でありその子飼ひの部下として永い苦勞をなめただけに今でも軍隊訓練の方式など馮玉祥のそれをそのままキリスト教式な嚴格きはまる方法を踏襲してゐる、濟南兵舎の堅きベツドに兵士と共に陣營の夢を結び、更に地方行政においても山東省民の信望を収めて政界からも軍界からもどつしりした人物とされてゐる、さらに韓復榘を政界に重からしむるものは山東省の富力で、山東省の農民たちは毎年滿洲方面に出稼ぎし、その稼ぎ高をあたかも南洋華僑のそれの如く莫大なる送金をする、これら貿易外の受取勘定が山東をどれだけ富ませてゐることか、正確な數字などもとより知るに由ないが韓復榘が豊かなる自給自足による財政で山東の彼の大部隊を飼つてゐるのもその故にこそである。

三 その他の人々

山西省にあつて牢固たる勢力をこゝに扶植してゐる閻錫山もこんどの熱河戦争では學良を助けて日本軍と決戦する旨を聲明してゐるが、これなどは支那式の聲明と見るべく果して自家の勢力を傾けて崩れゆく張學良政權を支持するであらうかは疑問としなくてはならぬ、却つてこの場合は山西モンロー主義の假面をかなぐり捨て、閻がその本領を發揮するかも知れないとさ

へ疑はれるだらう。

平漢線順徳に駐屯してゐた商震もこんどの戦争で北上したがこれも學良から頼まれて軍隊を北へ引具して来たゞけのことだし、宋哲元も商震と同じやうに表向き學良派の看板を掲げてはゐるが、支那軍隊の常としてさうすることが學良から軍費をまき上げて私服を肥やすに便利だからである、そこへ行くと馮玉祥は現在部下を有たないだけに言ふことはアツサリしてゐる、曰く「南方に眞に抗日の決心あらば余も亦誓死一戦せん」と。

坊間傳ふるところによれば宋哲元、韓復榘が學良政權崩壊の後舊主馮玉祥をロボツトとして北平の主人公に祭り上げ自分達の手に北支の全權を掌握せんとの野心から韓と宋哲元がひそかに歩みよつてゐると。

曰く何、曰く何、等、等、これらに諺言は熱河戦争の迫ると共に北支一ぱいに流れ溢れて、それ自體がすでに不安を孕んでゐる、この事實は何を語るか、それは張學良の政權に對する危惧と北支那政局の不安定を最も有力に指示するものであらう。

四 脚もと危ふき張學良

張學良もこの形勢を見て取つてゐる、學良が熱河問題よりも北支那の形勢をより多く顧慮するのはそのためであつて、彼がその有する二十萬の軍隊を熱河に傾注することが出来ず、約十六七萬の精銳の自家軍隊はこれを平津地方に留め、残りの三四萬の比較的粗惡な軍隊を熱河に送つてゐる一事を見ても學良の憂は彼にあらすして此れにあることがわかるであらう。最近新聞紙上しばしば傳へらるゝところの、張學良は場合によつては熱河を放棄し、退いて北支國境を守備するとの報道も、結局はこの理由に外ならないのである。

たゞこの際見逃すことの出来ないのは北支那住民の張學良に對する不信頼である、正月の山海關事件以來、北支那の地は同方面からの避難民で賑はつてゐるが、かうしたことが度重つては北支那住民たるものはたまつたものではない、支那民情の常として、支配者は張學良であつても、韓復榘であつても、乃至は誰人であつても文句はない、たゞ治安を維持し人心をして不安を抱かしめざる人こそ吾等の主人公である。もし張學良が滿洲擾亂の張本人であるといふことからして、日本や滿洲から絶えず恨まれてゐるものだとするならば、張の存在せん限りこの不安から免かるゝことは出来ざるべく、厄介千萬なる主人公といはねばならぬ、といつたやうな呪詛が次第に昂まつて來ることは張學良としては最も恐るべき事實であらう。

〔北支軍閥の展望〕

北支の軍界は張學良軍を中心とする幾多の雜軍からなつてゐるが、大體において(一)學良直系軍、(二)馮玉祥の舊部下であつた西北軍系諸將と、(三)閻錫山を頭目とする山西軍との三大勢力から成つてゐる。

第一の張學良直系軍は于學忠、王樹常、何柱國、萬福麟の四軍でその概略兵數二十萬と稱せられ、第二の學良傍系軍たる所謂舊西北軍諸將とは韓復榘、宋哲元、沈克、龐炳勳等の軍隊で勢力八萬と概算され、第三勢力たる閻錫山の山西軍は約十一萬といはれる、この外に平漢線順德を根據とする商震軍約二萬は舊主閻錫山を見限つて今では學良傍系軍の一役を買つて出てゐる、更に現在直系軍こそたぬが、學良軍内分裂の際、反學良派の頭目として北支軍界の王座を占むべき人々に段祺瑞、吳佩孚、馮玉祥の三人がある。

段、吳、馮の如き餘りにも有名な巨星のそれは略し、こゝには將來の人たる于學忠、王樹常、何柱國、萬福麟、韓復榘、宋哲元、商震等について簡單にその辿り來し道を物語らう。

于學忠

今こそ學良直系の第一軍長兼河北省政府主席として北支の要衝天津に鎮座し

關内に事あらば山海關の何柱國と共に第一番に外敵に當るべき所謂學良の前敵總指揮ともいふべき于學忠であるけれども元を洗へば吳佩孚の子飼ひの部下だ。彼が今日あるはひとへに直隸派の總帥吳佩孚の薰陶による、山東生れであるから韓復榘とも一脈相通するものがあるといふ、嘗つては奉天軍張作霖の幕下に加はり馮玉祥軍を大いに破つたこともある、作霖への恩義からその子の學良に忠誠をぬきんでてゐるんだといはれるから萬一吳佩孚再び起れば學良に絶縁するやうなことが無いともいへない、學良第一の武將の過去はこんなである、今年四十三と聞く。

王樹常

彼こそ張作霖以來の純然たる奉天派だ、だから學良にとつて心から信頼し得る武將は、實は、王樹常位なものだらう。日本陸軍大學出身で近代戰術にも最も通じてゐる彼であるが于學忠ほど實戰の經驗を有たない、打見たところ支那人特有の好大人であるがあのやうな人が本當にいざといふ場合死を誓つて學良を護るのではあるまいか、平津衛戍司令兼第二軍長として北平の守護に任じてゐる、四十八才の働き盛り、猪口才子のみ多い奉天派では彼王樹常は蓋しその重厚味において第一人者であらう。

何柱國

學良軍の山海關警備司令、年は四十に手がとゞいてゐるだらうが會つた感じ

は餘りにもモダン・タイプな紳士であるのに驚かされる、その勢力範圍たる秦皇島の海水浴場での接待が非常に手に入つてゐたのでリットン卿一行から『何柱國といふ人は非常な文明人だ』と譽められたといふ人、わが山海關守備隊長落合甚九郎少佐と陸軍士官學校時代の同期なので山海關のことは非常によく行つてゐたのにほんのしばらく彼が山海關を留守にしたばかりに彼の部下があつた山海關事件を惹起したことをしみく、残念がつつてゐたさうだ、最近それでも山海關で日本軍によくあれまで抵抗してくれたと學良から感謝され、おまけに第三軍長に任ぜられ學良軍の第一陣を承ることになつたのも奇しき縁である、嘗て吳佩孚から教へられたことがあり今でも吳佩孚を徳としてゐるといふから、學良から王樹常ほどの信頼を得てゐるかどうかは疑問である。

萬福麟

王樹常と共に張作霖以來の奉天派、張作相がフラ／＼してゐる今日學良の後見役として自重してゐる、學良軍の第四軍長でいつも學良のことを心から心配してゐるのは彼だ、満面髯といつた印象の彼、われ鐘のやうな聲ではなす萬福麟はモダン・ボーイばかりで圍繞されてゐる學良身邊の一異彩だ。

韓復榘

現任山東省政府主席、蔣介石と學良を牽制しながら戦はずして今日の大をな

した人物、舊主人の馮玉祥など足もとにもよりつけぬ政治家だ、濟南のわが西田總領事のこゝとを親友だといつてゐる、學良に萬一の際日本に命乞ひをしてやるのは韓だらうと一英字紙が報じてゐた、北支軍界において最も將來を囑望するものといへば彼をおいて他にない、それに彼の蟠居する濟南の地が南北支那を二分するその中心點である、彼のことを北支軍政界においてキヤスチング・ヴォートを有てるものと誰でも信じてゐる、四十四才の男ざかり

宋哲元

馮玉祥の部下として隨從すること十數年、つぶさに親分のクリスチャン・ゼネラルと苦勞を共にして來た男、北支雜軍として學良の目の上のごぶであつたところから察哈爾省政府主席に祭り上げて北平から撤退したら、泰山で梅の花など畫いてゐた馮玉祥が張家口に移り住んで來たので學良には宋と馮との仲が疑はれて仕方がないと傳へられる。

商震

今は學良軍の外様格だが、閻錫山のもとにゐてこそ商震も光つた、最近はずツパリ力がない、舊臘の北平順承王府の會議で召集令狀が發せられたものだから軍を率ゐてその本據たる平漢線順德を發し北平郊外に待機してゐる、年の頃は四十八才、日本士官學校の出身。

六 蔣介石の憂鬱

一 南北支那の兩主人公

説いてこゝまで来ると、どうしても張學良と蔣介石とに話が及ばなくてはならない、一口にいへば北支那の主人公とも稱すべき張學良、南支那の主人公ともいふべき蔣介石、この二人を中心として支那の全政局が轉回する。蔣介石を無視しては張學良の態度もハツキリいふことが出来ないし、張學良を抜きにしては蔣介石の立場もわからない、しからばこの南北兩主人公の政治的相關關係は如何。

大ざつばにいって、この兩人の關係は持ちつ持たれつである、もと／＼支那の政情はどうしても南北双方に別れがちのもので、少くとも民國になつて今日までの歴史を見るに、袁世凱政治の或る時代を除いて、完全な統一を見たことがない、すなはち北方の主人公が必ずしも南方を掩有することが出来なかつたやうに、南方の主人公も中々北方に手が伸ばせられない、今もその通り、蔣介石は對外的に支那を代表する大立物でありながら、北支那方面にはどうしても

勢力を伸ばすことが出来ない、昭和三年あの濟南事件が起つた時、蔣介石は自ら軍に將として北進また北進、遂に北京に入城したに拘らず、どうしても根が付かず、暫くして軍を回して南方に歸つたやうな次第で、南北兩支那の間に妙に解決の出来ないものがある。

蔣介石としてはならうことなら全支を自分の掌中に收めたい、しかし聰明な彼としてはそれが到底出来ない相談であることを百も二百も承知である、北支那においては蔣介石は全くよそ者である、反蔣介石熱は北支那において相當激しいものがある、この中に乗込んで行くといふやうなことはむしろ無謀に近い。

かうした情勢の下に張學良の北支における存在は、蔣にとりて都合のいゝ存在である。前にもしばしば述べたやうに張學良は目下北支において自己の政治的位置を維持するに汲々として餘念はない、況んや蔣介石に衝突かうなどいふ氣は毛頭ない、むしろ蔣介石に泣きついて、その援助を借りて自分の安全を期することに胸一杯である。こゝがまた蔣としてのねらひ處で、張學良を支持してさへおれば北支那は一應治まるであらうし北支那における反蔣熱もこれによつて抑へることが出来る、張學良は今蔣介石のために北方雜軍の押へ及び反蔣熱の押へのために國民政府から陸海空軍副司令の重職を授けられ、民國二十年の國民會議にはわざわざ南京に

までその出慮を促してゐるこれをもつても蔣が張を下にも置かねもてなしを見得るであらう。

また側面的に張學良の周圍を見れば自づとうなづかれる如く若き學良の周圍には歐米留學生上りの若い浙江人が多數あつたし、現在もあることである、浙江は蔣介石の生れ故郷でたとへばフランス留學生朱光沐、現北平市長周大文、そのほか安徽省人ではあるが常に蔣の國民黨と密接な關係を持ち民國十九年の南北戦争に吳鐵城、李石曾、張群らと共に學良をとりて中央擁護の通電を發せしめた胡若愚が常に影の形に添ふ如く學良の側近にゐる。

兩者の關係はかくの如く相關的であり、補充的であり、相互扶助的である、さればこそこんど熱河問題の急を告ぐるや蔣は夫人宋美齡の兄にして國民政府財政部長兼行政院長代理たる宋子文を北平に遣はして張學良軍隊の軍資の相談に與らしめたりなどしてゐる。

二 滿洲喪失の責任者

ところでこゝに一昨年の滿洲事變である。滿洲事變に次いで滿洲國建設、これは滿洲が張學良の勢力範圍であつただけに、滿洲を失つたのは一に張學良の責任であるとし、國民の滿洲事變に對する憤慨は、部分的には張學良への攻撃となつて、失地回復の責は彼にありといふこ

とになつた。張學良もこの輿論に對しては自分の政治的立場の維持上、何とかしてこれに應ぜねばならぬ、滿洲國內の匪賊に軍資を送つて國內の擾亂を計らしたのもそのためであり、勝利はとても覺束ない熱河戦争にいやくながら起たざるを得なくなつたのもこのためである。彼は國民の手前何とかせねばならぬのである。

同じ思ひは蔣介石の上にもある、國民の憤慨的輿論に答ふべく、蔣としてもチツとしてゐるわけには行かない、抗日政策を呼揚し、張學良の尻を突いて強硬態度を誇示してゐるのはそのためである。前にも述べたやうに、蔣と張とは目下のところ相互扶助の關係に立つ、その一傾けば他もまた安んずることが出来ない。

が、實をいへば蔣介石の南支那における立場も決して安全平和ではないのである、蔣の依つて立つところの國民政府の現状を見るに國權回復、以黨治國の三民主義をふりかざして無人の境に行く如く廣東から北京に奮進した往年の勇しい姿はいつの間にかきえてしまつて、國民黨内部も分立状態を示し、黨内の紛争は擴大こそすれ一向に止みさうもない。

一方國民の期待の的であつた國權回復運動はまるで進捗せず、滿洲、上海兩事變突發以來の國民政府乃至支那の國內事情は一層失望落膽に値するものばかりで蔣の率ゆる國民黨の信望は

今や餘く地を拂はうとしてゐる。

のみならず一黨專制、以黨治國のスローガンに反しその内部は今汪兆銘、陳公博一味の改組派、孫科、胡洪民の廣東派に分裂し廣東派の如きは上海事變に名をなした蔡廷階を引入れ四川雲南、貴州、廣東、廣西のほか福建に手をのばし西南各省聯盟をつくり、一方中國共産黨は江西を中心し湖北、湖南、河南、福建に出で勢ます／＼熾烈ならんとしつゝあり、中央政府の威令は僅かに浙江、江蘇、安徽、河南、湖北、湖南の各省に行はるゝに過ぎず、蔣はわづかに秘密結社藍衣社の如きファツシヨ機關をつくつて統制を維持しようとしてゐるのである。

三 機會を捉ゆる蔣介石

中にも最も蔣派にとつて苦しいものはその財政であらう、打ち續く内亂と共産軍討伐のためその赤字はますます／＼膨大なものになつて行く民國廿一年の豫算について見るに、歳出總額は七億八千萬圓、その中軍政費が四割六分、賠償金および公債償還金が三割五分見當、これに對して歳入は如何といふに總額六億二千萬元で結局一億六千萬圓は赤字となつてゐる、これに加ふるに現在においては銀の暴落と支那の對外輸出不振、滿洲國の獨立、各地の疲弊、かうしたこ

とが拍車を加へて折角に國民政府を支持してゐる浙江財閥にも大打撃を與へることゝなつた。

政治的、財政的にこんな苦しい立場に蔣介石は立つてゐる、この際展開されたのが國際聯盟の滿洲問題であり、熱河問題である、機會を捉ふるに機敏な蔣介石はこの好個の機會を失ふはずはない、即ち滿洲上海事變後から國民政府はあらゆる宣傳をもつて列國に叫び國際聯盟にすがつたが、嚴然たるわが國の主張の前に列國の牽制も聯盟の同情も實に恃むに足らぬ結果となつてしまつた、即ち蔣介石は支那が傳統の外交政策とする以夷制夷の策に失敗したのであるよつて第二段の策として蔣介石はこの非常時をきりぬけるため第三次中央全體會議を召集し、從來自己と反目の間にあつた孫科や汪兆銘を合流せしむることによつて國家統一の外形を繕ひ政治的、財政的窮境の轉換策としてこゝに對日強硬論を高唱した。

従つてこの會議の結果は各委員みな張學良に東北失地回復の大權を與へ東北軍の熱河移動を慫慂し、全國一般官吏軍人の俸給より一定額を義捐せしめ、新軍廿萬を募集して一年間河南、河北、山東の三省で訓練しこれが召募院總監に何應欽、副總監に朱培德を任命し軍政部は二百萬元を支出し獨米兩國より軍費にあつる借款をなすことを決議してゐる。

かくて蔣介石は表面對日強硬を唱へ學良の抗日に援助し反蔣派の糾弾を糊塗すると共に國民

の手前を繕ひ、一方國內統一を策して學良を誦らせてゐるのだ、學良が中央の命令で熱河侵入をやつてるか、に世間の手前を繕ふ蔣介石のするい芝居がしくまれてゐる。

七 熱河とはどんな處か

一 冬季は零下三十度以上

これで熱河問題を中心として何等かの波及を引起すであらうところの支那全政局を見た。これから再び熱河に返つて一體熱河とは、どんなところかを見よう。まづその戰場たるべき土地を見る。

蜿蜒たる萬里の長城の雄大絶壯の姿を西にして熱河省は支那と境してゐる、西は蒙古高原より東は遼河沿岸の平原に至る間丘陵、沙漠地帯をなし熱河省の東北半分は見渡す限り漢々たる内蒙古の曠野或は沙漠である、牧童が大陸的な駱駝に乗り地平線の彼方におちる夕陽の光をあびて羊を追返す可憐な姿を目のあたりに望むときこの國の景觀もおのづから首肯かれよう。

熱河省の面積は北海道の約二倍大であるが湖は極めて少い又西部及び南部は高原または山嶽

であつて、灤河上流の錐子山森林は乾隆帝の頃から伐木開墾を禁ぜられ廣潤たる大森林地帯で所謂「森林の海」を形造つてゐる。

氣候は大體において平原地帯は吉林、奉天地方と酷似してゐるが高原地帯は寒氣激しく二月ごろの氣温は零下三十度以上にも下る酷寒である、物産は極めて豊富である、その中最も著しいものは礦産、湖鹽、畜産および農産である、礦山は何といつても石炭が第一でその埋藏量は九百三十餘兆トンといはれる、まだあまり掘られてゐないが新邱の如きは滿鐵も相當投資してゐる有名な炭礦だ、その他北票石炭も有名である。

二 全省を掩ひ盡すけしの花

熱河の人口五百萬、その中蒙古人、滿洲旗人も各數十萬あるが、大部分は漢人種である、蒙古人は牧畜を業としてをり、馬、牛、羊、駱駝が最も多く、牛羊は彼等にとり缺くことのできぬ家畜である、その乳を飲み、その肉を食しその皮は衣服に用ひ、その毛、皮、骨、角を賣買してゐる。農産は色々あるが特記すべきはアヘンの産出で年産額は確でないがとにかく主な財源をなしてゐる、けしの花時の熱河と來たら日本の櫻とも比すべく大平原があつた可憐ななよよとした

花に掩はれてゐるのはまた格別な趣である。

熱河省天恵の資源開發せられないのは交通機關の缺陷に基因するところ大である。現在熱河省には鐵道として北票附近にあるのみで主な交通機關は不完全なる陸路と唯一の灤河水路あるのみで、しかも灤河は水量少く上流地方は水運極めて不便な憾みがある。然し道路は不完全ながら相當に發達し近年自動車網は大分開けて來た尙主な都市は左の通りである。

開魯 開魯は奉天省通遼の西方八十五キロ、熱河街道の中心で地方物産の重要集散地である、過去二回馬賊の襲撃に遭ひ焼打ちの災を蒙つたが今なほ十三層の白塔が聳え蒙古王族の本據たりし昔を偲ばせる。

朝陽 北票炭礦の西南約三十二キロにあり東西六町、南北十町の城壁に圍まれた都市である。

建平 海拔八百メートルの高原にある町で東西南北各四町、高さ三メートル餘の煉瓦で繞らされてゐる。

赤峰 沙漠地帯の招蘇河の右岸に赤峰がある乾隆帝のはじめ蒙古貿易の最前線として開市されたところで現在、省内商路の中心をなしてゐる、事變前日本の領事館分館あり一

時閉鎖したまゝになつてゐる。

熱河 一名承德ともいふ、所謂北狄の根據地で周圍は峻岳で繞らされ羊腸たる間道は狹隘にして天然の要害として名高い清朝が支那に君臨した當時最も危惧したのはこの方面の蒙古人であつたために、滿洲八族中の有力部隊を駐屯せしめる一方大喇嘛廟を建立しかつ熱河一帯の地を御獵地とし離宮を設けた、今日は熱河省の政治の中心で湯玉麟は元の離宮に省長官邸を置いてゐる。

平泉 大寶山の山麓にあり蒙古街道の十字路に當り北は赤峰、南は天津、東は朝陽に通ずる要衝である、平泉以東の朝陽街道は峻岳に掩はれてゐる。

凌源 北は赤峰南は綏中に通じ開魯街道と朝陽街道との交叉點にある重要地である

三 武陵桃源の地「熱河」

次に熱河の文化を見よう。

熱河省は元來蒙古人種發祥の地であり漢人種とはその言語、風俗、宗教の生活様式を全く異にせる蒙古人種の武陵桃源であつた。

熱河といへばやゝもすれば廣漠たる沙漠だけが連想されるが、文化の見るべきものも決してなしとはせぬ、殊に清朝は封禁の地として漢民族の移住を禁じ、この地を重んじて諸種の文化的施設を行つたものである、即ち熱河省の誇りとすべき熱河離宮、各地の宏壯な寺院諸廟は今になほ富饒なりし前朝盛時の面影を偲ぶに足るものがある。

離宮は康熙帝の四十二年に造営されたもので、周圍三千メートル、高さ七メートルの石牆をめぐらし、大小の池沼を各所に設け、殿宇の黃壁朱欄は碧水と相映するといつた豪華さ、この離宮は避暑山莊と呼ばれ康熙以下の諸帝盛夏をこゝに幸して暑を避けられてゐたが、清朝末期より行幸のことも絶えて修繕の業もなく、雜草の生えるに委せられ、最近湯玉麟は熱河討伐の空襲に生命の危険をおそれ、この離宮に一ヶ所百人の起居が出来る宏大な地下室を三ヶ所も作つたと傳へられてゐる。

避暑山莊内の文津閣には支那學術史上空前の大業として驚嘆される四庫全書、冊數三萬六千冊の國寶的書籍が藏せられてゐる、この文津閣本は奉天の文溯閣、北平紫禁城内の文淵閣と共に最も校正嚴密と目せられ、かつて佛國政府で一部を欲しいといふので調査したが、少くとも七十萬元を要するといふので中止となつたほどのものである。

離宮の北には有名な二大喇嘛廟がある。須彌壽福廟（札薩倫布ともいふ）と普陀宗乘廟（布打拉ともいふ）である。蒙古住民の宗教を物語つてゐる好個の記念物であり、二大廟を併せて金龍殿といはれてゐるものである。なほ乾隆帝の實像を安置するので有名な珠像寺、乾隆勅願の大佛寺、圓形の堂宇、丸亭、承德市街東方の伊犁廟等、その他各地の寺院、喇嘛廟は輪奐の美、往時文化の跡を偲ぶに足るものである。

なほ清朝時代木蘭園場に秋獮といつて毎秋天子親臨の狩獵が行はれてゐたことも、この地の人文史上忘れてならぬ一事である。

四 熱河の住民

住民は古來農業牧畜を営み純朴勇猛な蒙古人であつたが、清の嘉慶八年封禁の令が解かれてから、漢人種の河北、山東より移住するもの莫大の數に上り、言語、風俗も一變して土着民は次第に北方に驅逐され、且つ清朝の保護政策と喇嘛教信仰の蔽害、アヘン吸引の習慣などから、ますます柔弱退嬰の風を生じ、かつて成吉思汗、鐵木眞の英傑を生んだ蒙古人種は遂に漢人種とその地位を顛倒するに至り、現在では漢人種が省内住民の大部分を占めてゐる。だが彼ら蒙

古人にもなほ一脉の熱血なしとはせぬ、滿洲建國の際、悲運衰退の長夢から醒めて逸早く獨立を宣言して新國家の旗幟の下に馳せ参じたのである、現在省内において反湯玉麟の先鋒をなしてゐるものは、また蒙古人種であることは心強いことである。

政治組織の初めて確立されたのは前清雍正元年の熱河廳設置である、民國元年に特別行政區域に編入され次いで同三年熱河道が設置され承德以下十五縣が置かれ、同十七年には察哈爾、綏遠とともに現在の省制が布かれたのである。

滿洲事變前から湯玉麟は主席として熱河省に臨み、全くこれを自家の私有の如く考へ、蓄財に便利な要職には悉く自分の一族を据え貪慾好色の限りを盡し、省内に「黒、白、紅にあらざらんば成功せず」などいふ俗語がある通り、湯の悪政は周知の事實となつてゐる、黒はアヘンであり、白は銀貨であり、紅は美女を指すのである、アヘンと金と女、これが立身出世の對象物である、上の好むところ下これに倣ふで、湯の部下は給料不渡の際は容赦なく民家の財物を掠奪し、あらゆる罪惡が公々然として行はれてゐる。

八 熱河の歴史

(熱河は元來支那領土に非ず)

一 いはゆる塞外の地

熱河は萬里の長城即ち燕山山脈で劃然支那本土と區分された一領域をなし、現在でこそ漢民族が非常に多いが、彼らの移住したのは近世のことであつて、しかもその祖先は禁令を犯して潜入したいはゞ不逞の徒と目すべきものである。東胡、匈奴、鮮卑、突厥、契丹、遼、金、元の名のもとに熱河省の舞臺に三千年の歴史を綴つたものは蒙古人種である。蒙古人種が北方から漢民族を壓迫した事實は周時代において、すでにその證據を見出すことが出来るが、秦時代に至つては更に甚しきものがあり、かの剛愎暴戾の始皇帝をして遂に萬里の長城といふ世界史上においても驚くべき大工事即ち萬里の長城を構築せしめた、東胡とはいふまでもなく匈奴とともに蒙古人種である。

漢時代には蒙古人種の勢力ますます擴大強化し、漢の時代はほとんどこれと戦ふことに終始した、たゞ漢の武帝が大兵を起して今の奉天省南部まで、その勢力をおよぼしたこともあるがこれまた一瞬のことで再び長城以南に逐ひ返されてしまつた。

その後六朝、隋、唐の間も鮮卑、突厥等の蒙古人種の勢威盛んにして、漢民族は全く長城以南にとちこめられ、遼の時代におよんでは關外の地に英傑阿保機あり、たゞに滿蒙を統一したのみならず進んで北支を經略し、金時代にはその勢力遂に揚子江におよび、金衰へるや鐵木眞代つて支那本土まで統一し都を燕京に奠めて漢民族に君臨した、遼、金、元三朝は實に滿蒙民族の黄金時代を現出し、滿蒙人種のため萬丈の氣を吐いてゐる、明時代に入り太祖朱元璋は北伐の師を起して元の勢力を一時長城以北に退かしめたが、幾くもなく元の勢力は盛り返して長城以北を完全に蒙古人種の有としてゐる。

一一 清朝は熱河移住を禁止した

清朝三百年の歴史はいふまでもない。曠古の英雄奴兒哈赤は東邊の一角新濱（興京）に起り南北滿洲の統一より進んで明を滅ぼし、支那中原に君臨し三百年の間、漢民族を押へて微動だ

もしなかつた。この間長城以北は清室の私有領土として支那本部とは別個の國家を形勢し祖宗發祥の地として尊崇し、かつ支那の統治に失敗した場合の退據地として保有され、漢民族の滿洲移住は嚴禁され、いはゆる滿洲封禁の政策が勵行され、乾隆帝時代には路票なるものを作つて榆臨即ち山海關に關所を設け、路票なきもの、通行を嚴重取締り漢民族は熱河省に入ることは出来なかつたのである。

前述熱河省に現住する漢民族の祖先が封禁破りの不逞の徒であるといふのはこれがためである。ところが清の嘉慶八年に至り、支那本部における人口の増加と生活の窮情に鑑み、漢民族の移住を許すやうになり、自來河北、山東兩方面から移住した漢民族は純朴の土着民族を排除し漢民族は恰も昔から滿洲を依據してゐたかの如き主客顛倒の情勢を近々百五十年内外で現出してしまつた。しかも漢民族の多數移住せる現状から宗主權が漢民族にあるかの如く主張の一理由とするは全く根據なき謬論である。

かく古來よりの歴史は滿蒙民族の漢民族併合統一をば物語るが、漢民族が長城以北の滿蒙民族を併合統一した事實は殆んど載せてゐない。しかるに長城以北の今の滿洲國領域にやゝともすれば支那漢民族の宗主權が存するが如き錯誤を生ぜしめるのはなぜであらうか。

これは清朝建國の本義を理解しないからである。清の太祖奴兒哈赤が勢に乗じて支那本部に君臨した際、其私有に屬する滿洲領土は新に征服した支那本部と併せて大清帝國の版圖とした、この時における長城以北の滿洲領土の大清帝國における地位は、支那本部を領有する主人公であり漢民族は滿蒙人種に北面臣服したのである。故にこの時の滿洲は漢民族たる支那人の稱する如く、支那の領土ではなく、反つて支那本土が滿洲國の領土となつたわけである。清朝が支那本土に君臨する間こそ滿洲も支那の領土ではあるが、大清帝國崩壊した場合は、支那本土と長城以北の領域とは當然關係を分立すべき性質のものであり、滿洲の領域に對し清朝の宗主權こそ存すれ、漢民族がこれに對し何分喙を入れる權利はない。民國革命の際、彼ら支那人が「倒滿興漢」をスローガンとして起つたのも、當初明かに滿漢を二つにわけた正しい觀念に出發したものでないか。

今次清朝の廢帝溥儀氏が推されて長城以北の滿洲の領域に政を總攬するに至つたのは、まさに清朝の故土に歸還したもので、滿洲現在の状態は二十年前の形勢に復歸したものと云ふべきである。

九 熱河の今後をどうする

滿洲國ではすでに最後の決意を固め、軍政部内討熱作戰總司令部の名において二月十八日午後一時熱河討伐に關する重大聲明を發した、これに對して全熱河軍は先手を打つて日滿聯合軍の鼻柱をひつばたかんとするとの報もある、事態かうなつては聯盟も第三國もあつたものではない、斷じてやらねばならぬ、さて討伐が開始されると學良の正規軍や僞勇軍のみを空頼みとしてゐる熱河軍勢は到底日滿聯合軍の敵でない、恐らくは短かき期間において日滿聯合軍は省城熱河の占據に成功するだらうと想像される、かくて熱河は文字通り滿洲國王道の光を仰ぐことになる、日滿聯合軍協力による熱河討伐完成で滿洲國建國後の大きい軍事行動はここにめでたく大團圓となるのだ、あとは小匪賊討伐のみとなる。

ところで、熱河陥落後の全熱河軍中には滿洲國に歸順するものもあらう、しかし學良の正規軍乃至は僞勇軍は萬里の長城を越えて關内に入入するより外あるまい、しかしいづれにしても攻略完了後の熱河統治は容易ならぬ大事業だ、この際滿洲國の熱河統治方針を臆測するは冒險に似てゐるが滿洲國當局によつてなされた從來の聲明、覺悟等を参照、綜合すると大體次のやうなものである。

まづ討熱軍前敵總指揮張海鵬氏はその限りなき勳功により且つは執政の最も覺えめでたき侍従武官長である點から第一回の熱河省長に任命されることは彼、人共に期待するところであるたゞ熱河住民中重要分子を占める蒙古族は興安省と同じやうに蒙古人のための特別行政を布いてほしいと熱望してをり、一時は民政部中心の特別政治をとの議もあつたが最後の決定を見るに至らず、とりあへず軍政部中心の一種の武裝政治を布き、熱河土民の育成、統治に邁進することゝならう、省長任命の如きもそれを待たねばなるまい、今や世界の眼は神祕の地域熱河に向けられてゐる、ジュネーヴ交渉の中で現に最も重大な役割を演じてゐるこの熱河が滿洲國直接の統治下に入り安居樂業を鼓舞する時は間近い、富源の大部分は未踏査のまゝなのでこれが内容を詳細に知ることは今のところ困難であるが、その埋藏量無限を傳へられる北票や新邱の炭礦も漸を追うて鐵道交通の開かれると共に滿洲國ひいてはこれと攻守同盟を結ぶ日本にも豊富にそして安價に石炭の供給をなすに至るであらう、日本の缺乏してゐる石油についても期待できるとの説もある、農産物その他の物資もウンと出てくることが豫想される、おゝ、ほのかに明け行く熱河高原の朝ぼらけ、悠久千年の歴史を物語る喇嘛廟の大伽藍が靜かに熱河の黎明を壽ぎつゝあるではないか。

不許複製

昭和八年二月廿五日印刷
昭和八年二月廿八日發行

熱河をなぜ討つか

定價十錢

大阪毎日新聞社編

發行兼印刷人 荒木利一郎
印刷所 大阪府豊能郡茨田村字平尾四九九
株式會社 大阪毎日新聞社
發行所 大阪府北區堂島上二丁目三六
大阪毎日新聞社
同 東京市麴町區有樂町一丁目一一
東京日日新聞社

◆ 目書行刊社本 ◆

大阪 對支 經濟 聯盟 著	平野 岑 一著	大阪 每日 新聞 スタ イル ブック <small>(増補 改定版)</small>	平野 岑 一著	平野 岑 一著	大阪 商工 會議 所編 對支 調查 委員 會	乾 猷 平編	關東 軍 屬託 萩原 昌彦 著	本 社	本 社	本 社	久保 田辰 彦著	國際 聯盟 を脱 退し たら 日本 はど うな るか
滿蒙 の我 權益	文字 は踊 る	新聞 の知 識	野球 新戰 術	野球 新戰 術	滿蒙 經濟 の實 相	村句 集	陸を 耕す	英文 日本 紹介 號	英文 日本 紹介 號	編和 八年 每日 年鑑	天誅 組の 研究	國際 聯盟 を脱 退し たら 日本 はど うな るか
價四 十六 錢	價七 十六 錢	價三 十錢	價二 十錢	價二 十錢	價一 十錢	價一 十錢	價二 十錢	價一 十錢	價一 十錢	價一 十錢	價三 十錢	價十 二錢

大阪每日新聞社・東京日日新聞社

終

